The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー
Author(s)	工藤, 真由美; 高江洲, 頼子; 八亀, 裕美
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2007, 47, p. 151-183
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12701
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー

工藤　真由美
高江洲　頼子
八亀　裕美

1．はじめに

琉球列島の言語は，大きく北琉球方言（奄美沖縄方言群）と南琉球方言（宮古八重山方言群）に分かれるが，本稿の目的は，北琉球方言に属する那覇市首里方言における述語のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー体系の記述である。これは，述語における，事象の時間的側面（アスペクト・テンス），発話主体の認識的側面（エヴィデンシャリティー），さらには認識した事象に対する評価・感情的側面（ミラティヴィティー）の相関性を総合的に考察することでもある。（首里方言は琉球王国時代の王府の言語で，敬語を発達させ，かつては階級，性，年齢によって使い分けられていたが，本稿では敬語については扱わない。）

首里方言研究は，Chamberlain（1895）以来の長い歴史を有している。述語構造に関しても既に様々な論文があるが，本稿で特に注目するのは，＜エヴィデンシャリティー＞の存在である。これは，近年世界の様々な言語で精力的に研究が進められている，話し手が伝える情報のソースを表すカテゴリーである。しかも，「話し手が事象を目撃したこと」を表す＜直接的エヴィデンシャリティー＞と，「話し手が形跡や伝聞によって事象を間接的に認識したこと」を表す＜間接的エヴィデンシャリティー＞の2つのタイプが，アスペクト・テンス的側面，人称と絡み合いながら発達している。このような2つのエヴィデンシャリティーを有する方言は，本土の方言ではまだ報告されていない。

「猫が死んだ」という＜過去＞の事象を表現する場合，次のようになる。①の場合は，話し手が死ぬ現場を目撃したこと（目撃証言）を明示する。②の場合は，死ぬ現場は見ていない。「血痕を見て，猫が死んだことを確認（推定）したこと」あるいは「人から聞いて，猫が死んだという話し手にとっての新事実を確認したこと」，つまりは血痕のような形跡や伝聞のような間接的証拠に基づく確認であることを明示する。[(1)]

①maja:gwa:ja <u>sinutaN</u>.　猫が死ぬのを見た＜目撃＝直接的証拠に基づく確認＞

②maja:gwa:ja <u>size:N</u>.　猫は死んだのだ＜間接的証拠に基づく確認＞

津波古（1989）において「臨場性」という用語で取り出されているのは，①の＜直接的エ

ヴィデンシャリティー>であると思われるが，<間接的エヴィデンシャリティー>は取り出されていない。しかし，首里方言では<直接的エヴィデンシャリティー>を明示するのは動作や変化を表す<運動動詞述語>に限定されているが，<間接的エヴィデンシャリティー>を明示する形式は，運動動詞のみならず，存在動詞にも，形容詞述語や名詞述語にもある。上村（1963）では，「過去のことを根拠のある確かなこととして表わす」として「確言過去」という名付けが与えられている（ただし，「根拠のある確かなこと」が具体的にどういうことかは述べられていない）。

さらに<間接的エヴィデンシャリティー>を表す形式には，近年，諸言語の調査で注目されている「ミラティヴィティー（mirativity）」と呼ばれる，意外性を表す評価・感情的意味が発達している。例えば，上記の②の形 sizeːN は，次の③のように，今目の前で猫が死んでいるの（猫の死体）を見た時にも使うことができる。この場合は，「元気な猫だったのに死んでいる」といった，話し手の予想外な新事実であることを表す（この場合 sizeːsajaː のように終助詞「sajaː」を伴うのが普通）。この事実はこれまで十分には記述されていない。

③majaːgwaːja sizeːsajaː. 猫が死んでいる！

<話し手にとって意外な新事実（直接確認）>

エヴィデンシャリティー，ミラティヴィティーの研究が進んでいるトルコ語について，Slobin and Aksu(1982)では，「-miş」に次の3つの用法があることが指摘されている。(2)

Kemal gelmiş.(Kemal came.)

(a) Inference: The speaker sees Kemal's coat hanging in the front hall, but has not yet seen Kemal.

(b) Hearsay: The speaker has been told that Kemal has arrived, but has not yet seen Kemal.

(c) Surprise: The speaker hears someone approach, opens the door, and sees Kemal–a totally unexpected visitor.

首里方言の<間接的エヴィデンシャリティー>の形についても次の3つの用法がある。全く同じではないとしても極めて類似性が高い。

taruːja ceːN (ceːsajaː). （標準語に直訳すると「太郎は来てある」）

1）太郎の姿は見えないが，玄関にお土産があるのを見た場合

2）太郎の姿は見えないが，発話現場で人から太郎が来たことを聞いた場合

3）来ないと思っていたのに，太郎が玄関にいるのを見た場合

首里方言については既に多くの報告があるが，以上のような点に注目し，共同調査研究の結果を報告する。上述のトルコ語の論文から，本稿と関連する点を引用する。

1）Verbal expressions have traditionally been discussed in terms of tense, aspect, and

mood or modality, indicating, roughly the temporal placement of an event relative to the speech act, temporal contour of the event, and the attitude of the speaker towards the event. We wish to argue here that in practice, these categories cannot be studied in isolating from one another. As a case study, we present part of the Turkish verbal system.

2) Historically and ontogenetically, inferential forms seem to develop from forms expressing the perfect. (The particle encoding indirect experience is related historically and ontogenetically to the perfect.)

3) Underhill(1976) notes 'that there are cases where the speaker may know that the statement he is making is true but uses *-miş* to show that the information comes as a surprise or was not part of his knowledge previously.'

首里方言でも，本来はアスペクト・テンス形式であったと思われる形式が，その意味を部分的に残しつつ，エヴィデンシャルな，あるいはミラティヴな用法を発達させている。ここで述べられているように，アスペクト・テンス・ムードを切り離しては記述できない。本稿では，アスペクト・テンス・エヴィデンシャリティーを統合的に扱う。(3)

2．共同調査研究の経緯

本調査において，献身的なご協力を得た方は久手堅憲夫氏である。久手堅氏は，1933年生まれ。11～14歳まで学童疎開のため熊本県阿蘇郡で過ごしたほかは，那覇市首里で生活し現在に至る。幼い時から，祖父母と親密であったため，同世代の人よりも古い表現を聞く機会に恵まれた。地名の研究を長年続けておられるが，首里方言の記録保存にも強い関心をもち，いろいろな形で調査協力をなさっている。老年層においても，伝統方言は，極めて限られた方々だけが第1言語として習得・使用している状況である。中年層以下では，伝統方言よりもウチナーヤマトゥグチが基本（あるいは伝統方言の習得・使用は限定されたドメインのみ）ということを考えると，この報告は大変貴重である。

この調査は，2004年5月から開始された。調査票による調査（工藤編2005『方言における述語構造の類型論的研究』（科研費報告書）にその結果が報告されている）と同時並行で，調査票だけでは分析しきれない様々な形式について確認を行った。対面調査は32回にわたって断続的に実施した。調査票にはアスペクト，テンス，エヴィデンシャリティーに関わる調査項目は盛り込んでいたが，＜新事実の発見＝意外性＞に関わる用法は，調査票ではうまく捉えきれない現象として，調査分析の途上で気づいたものである。対面調査と合同研究会（12回）との往復運動で，徐々に首里方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティーの体系が明らかになった。本稿を書き上げる過程でも複数回の確認調査をさせていただいた。

後述するように，首里方言には極めて多くの形式がある。運動動詞には10の語形があるが，使用頻度が低く，意味用法の取り出しが大変困難であった語形もある。これは調査の不十分さが原因なのか，それともそもそも稀な形式で，無理矢理その意味用法を求めること自体が問題であるのか，判断に迷う。現時点で分からない点は，その旨明記する。

例は，音韻表記とし，対応する（疑似）標準語訳を付ける。(4)

3．述語の形式的側面

首里方言の述語形式は，形式と意味との対応関係が極めて複雑であり，過去の変化の激しさを物語っている。まず，動詞について，「形式的側面」から，一覧化すると次のようになる。（　）は頻度が高くない形式，＊は存在しないと思われる形式である。

動詞のタイプ ＼ 相当形式	存在動詞 有情主体	存在動詞 無情主体	主体動作動詞	主体動作 客体変化動詞	主体変化動詞
	「おる」	「ある」	「食べる」	「開ける」	「開く」
①スル	’uN	ʔaN	＊	＊	＊
②シタ	’utaN	ʔataN	kadaN	ʔakitaN	ʔacaN
③シオル	＊	＊	kanuN	ʔakiːN	ʔacuN
④シオッタ	＊	＊	kanutaN	ʔakiːtaN	ʔacutaN
⑤シテオル	(’utoːN)	＊	kadoːN	ʔakitoːN	ʔacoːN
⑥シテオッタ	(’utoːtaN)	＊	kadoːtaN	ʔakitoːtaN	ʔacoːtaN
⑦シテアル	’uteːN	ʔateːN	kadeːN	ʔakiteːN	ʔaceːN
⑧シテアッタ	(’uteːtaN)	(ʔateːtaN)	(kadeːtaN)	ʔakiteːtaN	(ʔaceːtaN)
⑨シオッテアル	＊	＊	kanuteːN	ʔakiːteːN	ʔacuteːN
⑩シテオッテアル	(’utoːteːN)	＊	kadoːteːN	ʔakitoːteːN	ʔacoːteːN
⑪シテアッテアル	(’uteːteːN)	(ʔateːteːN)	kadeːteːN	ʔakiteːteːN	ʔaceːteːN

上記の形式的整理から分かることは次の点である。

1）既に指摘されているように，①のスル相当形式は，＜存在動詞＞にはあるが，動的事象を表す＜運動動詞＞（主体動作動詞，主体動作客体変化動詞，主体変化動詞）にはない。（②のシタ相当形式はすべてにある）

2）上記とは逆に，③④のシオル，シオッタ相当形式（いわゆる連用形に存在動詞が複合した形式）は，存在動詞にはなく，運動動詞にはある。

3）⑤⑥のシテオル，シテオッタ相当形式は運動動詞にはあるが，存在動詞では，ないか，あったとしても使用頻度が高くない。(5)

4）⑦のシテアル相当形式はすべての動詞にある。存在動詞にもあることから，単純なアスペクト的意味を表しているとは考えにくい。

5）過去形の⑧シテアッタ相当形式は，主体動作客体変化動詞以外では使用頻度があまり高くない。[6]

6）⑨⑩⑪の形式は，シオル，シテオル，シテアル相当形式にさらに「アル」が複合化されているものである。これらは，運動動詞では使用されるが，相対的に存在動詞では使用頻度が低い。

7）⑨⑩⑪の複合形式の過去形はない。5）に述べたように，シテアッタという過去形の使用は動詞のタイプが限定されてきている。対応する過去形を使用しない（使用しにくい）という事実は，シテアル相当形式と⑨⑩⑪のような複合形式が，ムード的意味を表すようになっていることを推測させる。

次に，形容詞述語，名詞述語については，上記の①②⑦に対応する語形が確認できた（いわゆる形容動詞は基本的にない）。形容詞 kurusaN では，存在動詞アルが複合されている。名詞述語ではコピュラ「'jaN」が使用される。

	「黒い」	「先生だ」
①	kurusaN	siNsi: 'jaN
②	kurusataN	siNsi: 'jataN
⑦	kurusate:N	siNsi: 'jate:N

ここで注目されるのは，シテアル相当形式が，存在動詞を含むすべての動詞のみならず，形容詞述語（kurusate:N），名詞述語（siNsi: 'jate:N）にもあることである。シテアル形式は，アスペクト形式のように見えるが，アスペクトが分化するのは，動的事象を表す運動動詞であるから，本来はアスペクト的意味を表していたとしても，大きく発展して（文法化を進めて），別の意味になっているのではないかと思われる。「はじめに」のところで，＜間接的証拠に基づく確認＞＜意外性＞の意味用法があることを述べたが，ムード的意味が発達しているとすれば，形容詞述語や名詞述語にシテアル形式があっても不思議ではない。

以下，存在動詞，運動動詞の順に述べていく。形容詞述語，名詞述語についての詳細は紙幅の都合上本稿では述べない。存在動詞からはじめるのは，標準語などと同様に，運動動詞における有標のアスペクト形式の語彙的資源となるためである。

4．存在動詞

首里方言にも2つの存在動詞がある。主体が「有情物」の場合は，'uN であり，「無情物」の場合は?aN である。

「有情物」の存在動詞には，下記のような8つの形式が確認された。

（1） 'uN	オル相当形式
（2） 'utaN	オッタ相当形式
（3） 'ute:N	オッテアル相当形式
（4） 'uto:N	オッテオル相当形式
（5） 'ute:taN	オッテアッタ相当形式
（6） 'ute:te:N	オッテアッテアル相当形式
（7） 'uto:taN	オッテオッタ相当形式
（8） 'uto:te:N	オッテオッテアル相当形式

このうち，使用頻度が高く，調査でもすぐに回答が出るのは，（1）～（3）の3つの形式である。（4）～（8）の形式は使用頻度が低い。

用例については，下の部分に概略対応する標準語訳を入れているが，述語部分は（　）で括っている。対応する標準語がない場合には，理解しやすい標準語訳を入れたが，疑似標準語の場合もある（なお，実際の発話では「do:」等の終助詞を伴うことが多いが，付加しなくても非文にはならないため，用例ではこれを略す。ただし，「saja:」のような終助詞がつく方が自然である場合には，その点を明記する）。

（1）'uN には，大きく次の3つの用法がある。標準語の「いる」と同じである。人称制限はない。

①まず＜現在の一時的存在＞を表す。＜未来の一時的存在＞でもよい。

・'waNne:／'inagunu?uja:　te:rju:zonu　subaNkai　'uN.
　私は／母は　停留所の　そばに　（いる）

②＜反復習慣＞をも表す。＜現在＞でも＜未来＞でもよい。

・'ikiganu?uja:　ca:　'ja:Nkai　'uN.
　父は　いつも　家に　（いる）

③＜恒常的存在＞をも表す。

・?umiNkae:　?ijunu　'uN.
　海には　魚が　（いる）

（2）'utaN には，次の2つの用法がある。標準語の「いた」と同じである。'uN と'utaN は，標準語と同じく，＜非過去＞か＜過去＞かのテンス的対立を形成している。

①＜過去の一時的存在＞を表す。

・'waNne:／taru:ja　cinu:　'ja:Nkai　'utaN.
　私は／太郎は　昨日　家に　（いた）

②＜過去の習慣＞をも表す。

・macija: ca: taru:ga 'utaN.
店には いつも 太郎が（いた）

（3）'uteːN には，2つの用法がある。②では特に，終助詞「saja:」が付加した形が普通である。（「sa」だけの場合もある。）

①まず＜証拠に基づく過去の存在の間接確認＞を表す。1人称主語は不可である。下記のように＜話し手が知覚した形跡からの推定＞でもよいし＜発話場面で相手から聞いたこと＞であってもよい。最後の例のように＜過去の知覚した形跡を思い出して発話時に推定する＞場合でもよい（[ ] で場面を提示する）。

・[現在太郎はいないが，発話現場に太郎の煙草入れがあるのを見て]
taru:ja kumaNkai 'uteːsaja:／'uteːN.
太郎は ここに （いたのだ）

・[出てきた卒業証書を見て，東京にいたことを知って]
taru:ja 'warabi so:ine: to:kjo:Nkai 'uteːsaja:／'uteːN.
太郎は 子供の 頃には 東京に （いたのだ）

・[昨日太郎の姿が見えずどうしたのかと思っていたところ，発話現場で，相手からここにいたことを聞いて] cinu: taru:ja kumaNkai 'uteːsaja:／'uteːN.
昨日 太郎は ここに （いたのだ）

・[昨日太郎の姿が見えずあの時はどうしたのかと考えている時に，ここで煙草入れを見たことを思い出して] cinu: taru:ja kumaNkai 'uteːsaja:／'uteːN.
昨日 太郎は ここに （いたのだ）

話し手自身の過去の存在には'utaN を使用する（ただし，話し手がごく幼い頃のことで本人には記憶がなく，親から聞いて知った場面であれば，'uteːN が使用できる）。

②次に＜発話現場における意外なことの発見＞を表す。話し手の想定外のことであってもよいし，常識的に考えられないことであってもよい。この場合も，1人称は不可である。

・[既に学校に行っている時間なのに，部屋にいるのを見て]
ʔai, ʔja:ja ma:da 'uteːsaja:.
あれ，おまえは まだ （いる！）

・[普通蚊がいない時期なのに，蚊がいるのを見て] gazaNnu 'uteːsaja:.
蚊が （いる！）

なお，話し手自身のことを言う場合には，次のように，意識不明になっていた場合である（トルコ語の-miş も，話し手が unconsciousness の場合に使用される）。

・[お酒に酔って寝込んでいて，目が覚めて] ʔai, 'waNne: kumaNkairu 'uteːsajaː.
あれ，私は　こんな所に　（いる！）

（4）'utoːN は，最初出てこなかった形式である。調査後半になって，'uN とともに'utoːN が使用される場合もあることが分かった。ただし，<恒常的存在>の場合は使用できない。<一時的存在>の場合に使用されやすいが<反復>でも可能である。(7)

・'waNne: ʔiːcikiraQti kumaNkai 'utoːN／'uN.
私は　言いつけられて　ここに　（いる）

ただし，この形式が最も使用されやすいのは，次のような「非終止」の場合のようである。

・ʔjaːga kumaNkai 'utoːseː mizirasasa.
おまえが　ここに　（いるのは）めずらしい

（5）'uteːtaN は'uteːN の過去相当形式であり，（6）'uteːteːN は'uteːN にさらにアル相当形式が付加した形式である。この2つの形式は，あまり使用しないが，<話し手の意外性（驚き，あきれ）>といった感情・評価を前面化させる場合に，使用されやすいようである。すべて（3）の'uteːsajaː に言い換えることができる。義務的に使用しなければならない場面は取り出せなかった。

・[一緒に帰るべきだったのに，太郎が後まで残っていたと聞いて]
'Nnaga keːtimadi taruːja 'uteːtaN／'uteːsajaː.
みんなが 帰った後まで 太郎は　（いた！）

（7）'utoːtaN は'utoːN の過去相当形式であり，（8）'utoːteːN は'utoːN にアル相当形式がさらに付加された形式である。後者の形式は，一応ありそうだとの報告はあったが，自然な発話場面を取り出すことはできなかった。また，前者の形式についても自然な使用場面が出にくかった。次のような場面で使用できるとのことであったが，'utaN の方が自然である。

・cinuːja ʔNmagaNcaːga cuːNdi ʔiːteːkutu,
昨日は　孫たちが　来ると　言っていたから，
'waNne: hitimitinu ʔeːda 'jaːNkai 'utaN／'utoːtaN.
私は　午前の　あいだ　家に　（いた）

次に，「無情物」の存在動詞には5つの形式がある。調査時に，繰り返し明確に出てきたのはやはり（1）～（3）の形式である。'uN の場合と同様に（4）（5）の形式は義務的に使用される場面を取り出すことはできなかった（紙幅の都合上，（1）～（3）の用例は簡略に示すこととし，（4）（5）についても略す）。

(1)	ʔaN	アル相当形式
(2)	ʔataN	アッタ相当形式
(3)	ʔate:N	アッテアル相当形式
(4)	ʔate:taN	アッテアッタ相当形式
(5)	ʔate:te:N	アッテアッテアル相当形式

(1) ʔaN（アル相当形式）の意味用法は，'uNと同じであり，<現在・未来>の<一時的存在><反復習慣>，<恒常的存在>を表す。<現在>の例のみを示す。

・kunu　na:kaNkai　guminu　ʔaN.
　この　中に　ゴミが　(ある)

(2) ʔataN（アッタ相当形式）は，<過去>の<一時的存在><反復習慣>を表す。

・cinu:　kumaNkai　guminu　ʔataN.
　昨日　ここに　ゴミが　(あった)

(3) ʔate:N（アッテアル相当形式）は，ʔate:saja:というかたちで使用されやすい。<証拠に基づく間接確認>というエヴィデンシャルな意味を表す。

・[発話現場にゴミは既にないが，汚れているのを見て]
　kumaNkai　guminu　ʔate:N／ʔate:saja:.
　ここに　ゴミが　(あったのだ)

現在の存在に対する<意外性（驚き）>も表す。この場合はʔate:saja:の方が使用されやすい。

・[別の場所だと思っていたにも関わらず，目の前にあるのを見て]
　ʔai,　kumaNkai　ʔate:saja:／ʔate:N.
　あれ，ここに　(ある！)

以上のことから，存在動詞においては，基本的に3つの形式が，次のように対立していることが分かる。

(1)	'uN	ʔaN	<非過去>
(2)	'utaN	ʔataN	<過去>
(3)	'ute:N	ʔate:N	<間接的証拠><意外性>

テンス対立だけでなく，<間接的証拠に基づく確認>というエヴィデンシャルな意味や<意外性>というムード的意味を表す形式の存在が，首里方言の大きな特徴である。

5．運動動詞

運動動詞にはアスペクト対立があるため，動詞分類が重要になる。以下では，<主体動作動詞><主体動作客体変化動詞><主体変化動詞>の順序で述べる。主体動作動詞から始め

るのは，相対的に形式と意味用法との関係が単純だからである。

5.1　主体動作動詞

kanuN（食べる）を例にすると，形式上，次のような10の形式がある（以下，この形式を代表形とする）。

方言形式	相当形式	主要な意味
（1） kanuN	シオル	＜完成・未来＞
（2） kadaN	シタ	＜完成・過去＞
（3） kado:N	シテオル	＜動作進行・現在＞
（4） kado:taN	シテオッタ	＜動作進行・過去＞
（5） kanutaN	シオッタ	＜直接確認（目撃）・過去＞
（6） kade:N	シテアル	＜間接確認（過去）＞
		＜意外性＞
（7） kade:te:N	シテアッテアル	＜意外性（間接確認）＞
（8） kado:te:N	シテオッテアル	＜意外性＞＜間接確認＞
（9） kanute:N	シオッテアル	＜意外性（性質，能力）＞
（10） kade:taN	シテアッタ	＜間接確認・過去＞＜意外性＞

概観すると，まず，留意すべきは，スル相当形式がないことである。

中核的なアスペクト・テンス形式は，（1）～（4）の形式である。この4つの形式については，主語（主体）の人称制限はない。

（5）～（10）の形式は，人称制限を伴いつつ＜証拠性（証拠に基づく確認）＞や＜意外性＞を表すようになっている。このうち，基本的なのは（5）（6）であり，＜過去の動作＞の＜直接確認（目撃）＞か＜間接確認＞でエヴィデンシャルに対立している。さらに（6）の形式には＜意外性＞の意味用法がある。この場合は，話し手の確認のし方は＜直接確認＞であってもよく，テンス的にも過去の動作でなくてもよい。発話時における話し手の意外性（想定外の動作の発見）という評価・感情的意味が前面化される。

（7）～（10）の形式を義務的に使用する場面を明確に取り出すことはできなかった。複数回の確認調査を実施したが，基本的には（6）の kade:N 形式で言うことができるようである。ただし，一定の使い分けの傾向を取り出すことはできた。

以下，順次，形式ごとにみていく。

（1）シオル相当の kanuN には，次のような意味用法がある。スル相当形式がないことから＜完成・未来＞の意味をこの形式が表す。

①＜完成・未来＞

・[夕食のことが話題になって] 'waNne:／taNme:ja tiNpura kanuN.
私は／おじいさんは 天ぷらを（食べる）

②<直前・近未来>

・?ai, namaniN ?aminu huiN.
あ, 今にも 雨が（降る）

③<動作進行・現在>を表すのは，基本的にシテオル相当の kado:N 形式である。しかし，次のように言えなくはない。

・[今何をしているのかと聞かれて] saNru:tu saki numuN.
三郎と 酒を（飲んでいる）

④<反復習慣・現在（未来）>

・'ikiganu?uja: me:nici saki numuN.
父は 毎日 酒を（飲む）

⑤<恒常性>

・'warabe: taNka:nu ma:du taQci ?aQcuN.
子供は 1歳の誕生日の前に 立って（歩く）

（2）シタ相当の kadaN 形式には，次のような意味用法がある。標準語と同じである。

①<完成・過去>

・'waNne: cinu: tiNpura kadaN.
私は 昨日 天ぷらを（食べた）

・cinu: 'junakani ?aminu hutaN.
昨日 夜中に 雨が（降った）

②<パーフェクト・現在>

・[もうご飯を食べたかと聞かれて] ?i:, na: kadaN.
うん，もう（食べた）

③<反復習慣・過去>

・'ikiganu?uja: 'wakasaru zibuno: saki nudaN.
父は 若い 時には 酒を（飲んだ）

（3）シテオル相当の kado:N 形式は<現在・未来>の<動作進行>を表す。標準語のシテイル形式と同じである。また<パーフェクト・現在><反復習慣>も表す。<パーフェクト・現在>は kadaN に，<反復習慣>は kanuN に言い換えてもよい。

①<動作進行・現在（未来）>

・saNru:ja／'waNne: nama tiNpura kado:N.
三郎は／私は 今 天ぷらを（食べている）

②<パーフェクト・現在>

・[ご飯を食べたかと聞かれて] ʔa:, na: kado:N／kadaN.

ああ，もう　(食べた)

③<反復習慣・現在（未来）>

・'ikiganuʔuja: me:nici saki nudo:N／numuN.

父は　毎日　酒を　(飲んでいる)

（4）kado:taN は，kado:N の過去形式である。<過去>の<動作進行>を表す。<反復習慣>も表す。<反復習慣>は kadaN に言い換えてもよい。

①<動作進行・過去>

・saNru:ja tiNpura kado:taN.

三郎は　天ぷらを（食べていた）

②<反復習慣・過去>

・'ikiganuʔuja: 'wakasaru zibuno: saki nudo:taN／nudaN.

父は　若い　時には　酒を　(飲んでいた)

以上のことから，基本的には，標準語と同じ次のようなアスペクト・テンス体系を形成している。kanuN は，その形式的側面から言って，本来は<進行・現在>であったと思われ，まだこの意味を残してはいるが，スル相当形式の消滅によって，<完成・未来>の意味が基本になっている。この4つの形式には，主語の人称制限はない。

テンス＼アスペクト	完　成	進行（動作継続）
非過去	kanuN	kado:N (kanuN)
過　去	kadaN	kado:taN

（5）シオッタ相当の kanutaN 形式は<話し手が過去時に動作を知覚したこと>を明示する。1人称主語は不可である。基本的に<目撃(視覚)>であるが<聴覚による確認>の場合でもよい。また，<動作全体>を目撃したのでも，動作開始後の<進行過程>を目撃したのでもよく，もはや<進行>というアスペクト的意味には縛られていない。1人称主語の場合や話し手が知覚（目撃）しなかった場合には，シタ相当の kadaN 形式を使用しなければならない。[8]

・'ikiganuʔuja: cinu: saki numutaN.

父は　昨日　酒を（飲んだ）<目撃（視覚）>

・[雨音を聞いたのを思い出して] cinu:ja 'junakani ʔaminu huitaN.

昨日は　夜中に　雨が　(降った)<聴覚>

形式的側面からみて，kanutaN は本来<進行・過去>の意味を表したと思われる。しかし，これを表すのは現在では，kado:taN になっている。kado:taN には，人称制限は

ない。

kanutaN は＜反復習慣・過去＞をも表す。この場合は人称制限がなく，kadaN, kado:taN に言い換えてもよい。

・'ikiganuʔuja:／'waNne:　me:nici　saki　numutaN／nudaN／nudo:taN.
　父は／私は　毎日　酒を　（飲んでいた）

＜未遂（非実現）＞の意味も表す。やはり人称制限はない。

・[人の酒をあやうく飲みそうになったが飲まなかった場面で]
　'jagati　numutaN.
　もう少しで（飲むところだった）

このように見てくると，西日本方言のシヨッタ形式との共通性が高いことに気づく。違いは，西日本方言では人称に関係なく＜動作進行・過去＞の意味を表すのに対して，首里方言では，人称制限を伴いつつ，進行というアスペクト的意味から＜直接確認＞というエヴィデンシャルな意味に変化しているという点である。

シオッタ相当形式	首里方言　kanutaN	西日本方言　タベヨッタ
	★＜直接確認・過去＞ ＜反復習慣・過去＞ ＜未遂＞	★＜動作進行・過去＞ ＜反復習慣・過去＞ ＜未遂＞

このような違いが生じた原因として，首里方言における kado:taN 形式の使用が考えられる。首里方言では，kado:N，kado:taN 形式が＜進行＞の意味を担い，それに連動して，kanuN は＜完成・未来＞の意味になり，kanutaN は＜直接確認・過去＞の意味にシフトしたと思われる。kanuN の場合は，スル相当形式の消滅によって人称に関係なく＜完成・未来＞になったのだが，kanutaN の場合は，kadaN 形式の存続によって，＜直接確認＞というエヴィデンシャルな意味の方にシフトしたと思われる。

●スル形式の消滅

kanuN　（＜進行・現在＞）→　＜直前・近未来＞　→　＜完成・未来＞

kanutaN（＜進行・過去＞）→　＜直接確認・過去＞（人称制限）

↑↑　●kadaN の存続

kado:N＜進行・現在＞

kado:taN＜進行・過去＞

（6）シテアル相当の kade:N 形式は，＜直接確認＞の kanutaN と対立して＜間接確認＞を表す。人称制限がある。

まず，次の場合は<形跡の知覚に基づく過去の動作の推定>である。kanutaN と違い，話し手は過去の動作を直接確認していない。

・[皿が空になっているのを見て]

taru:ja kamaNdi ʔi:tarumuN, kade:N／kade:saja:.

太郎は 食べないと 言ったのに， (食べたのだ)

・[部屋が酒臭いのを感じて]

'ju:bi kumaNzi saki nude:N／nude:saja:.

ゆうべ ここで 酒を (飲んだのだ)

以上の場合は<形跡>だが，次のような場合でも kade:N が使用される。普通とは異なる状況であるので，kade:saja: の方が使用されやすい。(<意外性>の意味も複合されている。)

・[食いしん坊の太郎が食べようとしないのを見て]

taru:ja tasikani biciNzi kade:saja:／kade:N.

太郎は 間違いなく よそで (食べたのだ)

・[朝なかなか起きてこないので部屋を覗いたところ，太郎と三郎が寝ているのを見て]

taru:ja cinu:ja saNru:tu cuhwa:ra nude:saja:／nude:N.

太郎は 昨日は 三郎と たくさん (飲んだのだ)

さらに，発話現場での<伝聞による間接確認>でもよい。話し手にとっての<意外な新情報の間接確認>であることが多いので，kade:saja: が使用される。(9)

・[酒が減っているのでどうしたのだろうと思っていたところ，発話現場で酒を飲んだ話をしているのを聞いて]

saNzu:neNku:suNkae: ti: cikiNnajo:Ndi ʔice:tarumuN,

30年古酒には 手を つけるなよと 言ってあったのに，

kunumuNnuca:ga nude:saja:.

こいつらが (飲んだのだ)

以上はすべて<過去の動作の間接確認>であるが，さらに<現在の意外な動作進行の目撃（直接確認）>の場合でも，kade:N が使用できる。話し手の評価的感情に中立的に言う場合には，kado:N を使用する。

・[発話現場で太郎が酒を飲んでいるのを見て]

taru:ja cu:ja numaNdi ʔi:tarumuN, nude:saja:.

太郎は 今日は 飲まないと 言ったのに，(飲んでいる！)

以上のように，kade:N は，人称制限を伴いつつ<証拠に基づく間接確認>と<意外性（驚き）>を明示する。(10)

過去の動作	kadaN	＜確認のし方に中立＞（人称制限なし）
	kanutaN	＜話し手の直接確認＞
	kade:N	＜話し手の間接確認＞
現在の動作進行	kado:N	＜感情評価に中立＞（人称制限なし）
	kade:N	＜意外性（新情報の発見）＞

なお，シテアル相当形式は，＜動作パーフェクト＞をも表す。この場合は，人称制限がなく，kadaN 形式や kado:N 形式に言い換えることができて，上記の場合とは同じではない。

・[昼ご飯を食べたかと聞かれて] ʔa:, na: kade:N／kadaN／kado:N.
ああ，もう （食べた）

また，次のように＜未遂＞の意味でも使用できるようである。この場合も人称制限はなく，numutaN に言い換えることができる。

・[お酒を飲みそうになったが，直前でとりやめた場面で]
ʼjagati numute:N／numutaN.
もう少しで（飲むところだった）

（7）シテアッテアル相当の kade:te:N は＜意外なことの間接確認＞である場合に使用されやすいようである。kade:N に言い換えることができる。[11]

・[樋が落ちているのを見て] kune:danu ʔame: so:to: hute:te:saja:／hute:saja:.
この間の 雨は 相当 （降ったのだ！）

（8）シテオッテアル相当の kado:te:N は＜意外なことの直接確認＞を表す。kade:saja: に言い換えてもよい。

・[飲まずに待っていると思ったのに飲み始めているのを見て]
ʔai, na: nudo:te:saja:／nude:saja:.
あれ，もう （飲んでいる！）

＜過去の動作の間接確認＞をも表すが＜意外性＞がつきまとうようである。kade:saja: に言い換えてもよい。

・[晴れだと思って干したのに洗濯物が濡れているのを見て]
huraNdi ʔumutarumuN, ʔaminu huto:te:saja:／hute:saja:.
降らないと 思ったのに， 雨が （降ったのだ！）

・[昨日の夕食を太郎が全く食べなかったのは変だと思って考えていたところ，友達の家に行っていたことを聞いて] cinu:ja taru:ja biciNzi kado:te:saja:／kade:saja:.
昨日は 太郎は よそで （食べていたのだ！）

（9）シオッテアル相当の kanute:N は＜意外な動作の直接確認＞を表すが，kado:te:N と

違って，＜予想外の能力・性質の発見＞に重点がおかれるようである。

・[太郎が友達と今酒を飲んでいるのを見て]

taru:ja sake: numaNdi ʔumutasiga, dusinuca:tu 'jare: numute:saja:.

太郎は 酒は 飲まないと 思ったけど， 友人達と だったら（飲むのだ！）

人から聞いて＜意外な能力・性質＞に気づく場合（間接確認）であってもよい。

・[太郎はラッキョウが嫌いだと思っていたが，昨日食べたことを人から聞いて]

taru:ja daQco: kanute:saja:.

太郎は ラッキョウを（食べるのだ！）

(10) のシテアッタ相当の kade:taN は，主体動作動詞では出てきにくかった。意味用法上は，＜過去の間接的証拠に基づくそれ以前の動作の推定＞を表す。この場合でも，意外なことの場合に使用されやすく，シテアル相当形式の kade:N に言い換えてもよい。

・[昨日空になったお皿を見たのを思い出して]

cinu:ja taru:ja kamaNdi ʔi:tarumuN, kade:taN／kade:N.

昨日は 太郎は 食べないと 言ったのに，（食べてあった）

＜過去の意外な動作の目撃（直接確認）＞の場合でもよいようである。

・[天ぷらが嫌いな太郎が食べているのを見たのを思い出して]

taru:ja 'waraba:ta:tu tuiba:ke: Qsi kade:taN.

太郎は 子供たちと 取り合いを して（食べた！）

5.2 主体動作客体変化動詞

主体動作客体変化動詞にも，次の10の形式がある。動詞「開ける」を例として示す。主体動作動詞との大きな違いは，シテアル／シテアッタ形式の位置である。主体動作動詞とは違って，主体動作客体変化動詞では＜客体結果＞というアスペクト的意味を表す。この＜客体結果＞というアスペクト的意味は，シテオル／シテオッタ相当のʔakito:N／ʔakito:taN が表す＜動作進行＞というアスペクト的意味と対立するものである。ただし，後述するように標準語とは違って，動作主体を主語として表すことから，推定というムード的意味も複合されている。

方言形式	相当形式	主要な意味
(1) ʔakiːN	シオル	＜完成・未来＞
(2) ʔakitaN	シタ	＜完成・過去＞
(3) ʔakitoːN	シテオル	＜動作進行・現在＞
(4) ʔakitoːtaN	シテオッタ	＜動作進行・過去＞
(5) ʔakiteːN	シテアル	＜客体結果・現在＞ ＜間接確認＞＜意外性＞
(6) ʔakiteːtaN	シテアッタ	＜客体結果・過去＞ ＜間接確認・過去＞＜意外性＞
(7) ʔakiːtaN	シオッタ	＜直接確認・過去＞
(8) ʔakiteːteːN	シテアッテアル	＜意外性＞
(9) ʔakitoːteːN	シテオッテアル	＜意外性＞
(10) ʔakiːteːN	シオッテアル	＜間接確認（意外な性質）＞

(1) シオル相当のʔakiːNの意味用法は，主体動作動詞と同じである。人称制限はない。

①＜完成・未来＞＜直前・近未来＞

・[いつ雨戸を開けるかと聞かれて] ʔaca　rukuzini　ʔakiːN.
明日　6時に　(開ける)

・[雨戸に手をかけるのを見て] ʔai,　taruːga　hasiru　ʔakiːN.
あれ，太郎が　雨戸を（開ける）

②＜動作進行・現在＞は，ʔakitoːNを使用するのが普通だが，ʔakiːNも可能である。

・taruːga　hasiru　ʔakitoːN／ʔakiːN.
太郎が　雨戸を　(開けている)

用例は略すが，＜反復習慣・現在（未来）＞＜恒常性＞も表す。

(2) ʔakitaNは，＜完成・過去＞＜パーフェクト・現在＞＜反復習慣・過去＞の意味を表す。人称制限はない。

①＜完成・過去＞

・taruːga　hasiru　ʔakitaN.
太郎が　雨戸を　(開けた)

・'waNneː　kiQsa　ʔiːbi　ciQcaN.
私は　さっき　指を　(切った)

②＜パーフェクト・現在＞

・[もう薪はわったかと聞かれて] ʔiː,　naː　tamunoː　'wataN.
うん，もう　薪は　(割った)

③＜反復習慣・過去＞

・me:ja 'ja:nu hasiro: ca: 'wa:ga ʔakitaN／ʔakito:taN.
以前は 家の 雨戸は いつも 私が （開けた）

（3）ʔakito:N は，<動作進行・現在（未来）><反復習慣・現在（未来）>を表す。標準語のシテイル形式と同じである。<反復習慣>の場合は，ʔaki:N と競合する。

①<動作進行>

・taru:ga hasiru ʔakito:N／(ʔaki:N).
太郎が 雨戸を （開けている）

②<反復習慣>

・'waNne: me:nici tamuN 'wato:N／'waiN.
私は 毎日 薪を （割っている）

（4）ʔakito:taN は，ʔakito:N の過去形である。<過去の動作進行><過去の反復習慣>を表す。<反復習慣>の場合は，上述のように，ʔakitaN でもよい。

・hasiro: taru:ga ʔakito:taN.
雨戸は 太郎が （開けていた）

（5）シテアル相当のʔakite:N は<客体結果・現在>を表す。標準語のシテアルと違って，動作主体が主語になる。そのため，次の場合，動作主体は発話現場にいないので，動作主体の特定には話し手の<推定>がある。ただし，話し手自身の場合には，話し手の意図性を明示する。このような場合は，非終止での使用が多いようである。

①<客体結果・現在（動作主体の推定）>

・[太郎の姿は見えないが，雨戸が大きく開いているのを見て]
taru:ga hasiru ʔakite:N.
太郎が 雨戸を （開けてある）

・kwaNtuʔue: 'wa:ga ciQce:kutu, ʔatukara 'Nnasa:ni kamijo:.
スイカは 私が （切ってあるから），後で 皆で 食べなさい

次の②③④の用法は，主体動作動詞と同じである。

②<形跡に基づく過去の動作の推定（間接確認）>

・[雨戸は今閉まっているが，木の葉が部屋に入っているのを見て]
ta:ganaga mata hasiru ʔakite:N／ʔakite:saja:.
誰かが また 雨戸を （開けたのだ）

③<伝聞による間接確認>

・[錆びて開かない箱が開いたのを知り，誰が開けたのだろうと思っていたところ，発話現場で太郎が開けたことを聞いて]

kunu hako: taru:ga ʔakite:N／ʔakite:saja:.

この 箱は 太郎が （開けたのだ）

④<意外性（動作自体の直接確認）>

・[開けるなと言っておいたのに雨戸を開けている現場を見て]

taru:ga hasiru ʔakite:saja:.

太郎が 雨戸を （開けている！）

・[子供なので無理だと思っていた孫が木を切る現場を見て]

ʔai, ʔja:garu ciQce:saja:.

あれ，おまえが（切っている！）

（6）ʔakite:taN は，ʔakite:N の過去形である。<客体結果・過去>の意味で使用される。<形跡に基づく推定>の場合もないわけではない。

①<客体結果・過去>

・[過去時に雨戸が開いていたのを見たのを思い出して]

taru:ga hasiru ʔakite:taN.

太郎が 雨戸を （開けてあった）

②<形跡に基づく以前の動作の推定>

・[雨戸は閉まっていたが，縁側が濡れていたのを思い出して]

taru:ga hasiru ʔakite:taN.

太郎が 雨戸を （開けたのだ）

以上のことから，主体動作客体変化動詞では，次のようなアスペクト・テンス対立を形成している。

テンス＼アスペクト	完 成	進 行	客体結果（推定）
非過去	ʔaki:N	ʔakito:N（ʔaki:N）	ʔakite:N
過 去	ʔakitaN	ʔakito:taN	ʔakite:taN

主体動作動詞と違って，ʔakite:taN という過去形がよく使用されるのは<客体結果・過去>を表すからである。ただし，<客体結果＝動作主体の推定>であって，ʔakite:N／ʔakite:taN は単純なアスペクト的意味ではない。ʔakite:N は，このような<現在の客体結果＝動作主体の推定>から出発して，<現在の形跡に基づく過去の動作の推定（間接確認）><伝聞による間接確認>へと発展し，さらに<意外性>というムード的意味へと発展したと思われる。

<現在の客体結果＝過去の動作主体の推定>

→<現在の形跡＝過去の動作の推定（間接確認）>

→<伝聞による過去の動作の間接確認>

→<意外な新情報の発見>（ムード的意味）

＜客体結果＞というアスペクト的意味は，主体動作動詞にはないが，＜間接確認＞＜意外性＞の意味用法は，主体動作動詞にもある。この＜間接確認＞というエヴィデンシャルな意味と対立するのが，次に述べる＜直接確認＞の?akiːtaN である。

（7）シオッタ相当の?akiːtaN は，人称制限を伴いつつ，＜過去時における話し手の動作の知覚（直接確認）＞を明示する。主体動作動詞と同様に，動作全体であっても，動作進行であってもよく，進行というアスペクト的意味からは解放されている。

・[鶴ちゃんがスイカを切っているのを見たのを思い出して]

cirucaNga kwaNtu?ui ciːtaN.

鶴ちゃんが スイカを （切った）＜目撃（視覚）＞

・[太郎の部屋の引き雨戸ががたがたと開く音を聞いて]

'juːbi 'junakani taruːga hasiru ?akiːtaN.

ゆうべ 夜中に 太郎が 雨戸を （開けた）＜聴覚＞

なお，主体動作動詞と同様に＜反復習慣・過去＞＜未遂＞の意味でも使用される。この場合には人称制限はない。

以下の（8）（9）（10）の?akiteːteːN，?akitoːteːN，?akiːteːN は，ニュアンスの違いがでてくる場合はあるが，基本的に?akiteːN に言い換えることができるようである。そして終助詞「sajaː」の付加が普通である。

（8）シテアッテアル相当の?akiteːteːN は，まず＜意外な客体結果＞を表す。次の場合は，?akiteːteːsajaː でも?akiteːsajaː でもよい。

・[スイカを切ろうとしたところ，スイカが切ってあるのを見て]

?ai, kwaNtu?ueː taːganaga ciQceːteːsajaː／ciQceːsajaː.

あれ，スイカは 誰かが （切ってある！）

次のような＜客体結果＞を中立的に言う場合や＜話し手の意図性＞がある場合には，?akiteːteːsajaː は使用しにくい。

・[お母さんの姿は見えないが，スイカがテーブルにあるのを見て]

'inagunu?ujaː kwaNtu?ui ciQceːN.

お母さんが スイカを （切ってある）

・kazi ?iriːru tamini, ?amanu hasiroː 'waːga ?akiteːN.

風を 入れる ために，あそこの 雨戸は 私が （開けてある）

＜形跡に基づく意外な過去の動作の推定（間接確認）＞の場合にも，使用できなくはない。?akiteːsajaː に言い換えられる。

・[スイカの好きな人がスイカを食べないのでどうしてかと思ってスイカを食べたところ，肉臭いにおいがするのに気づいて]

sisiciribo:ca:sa:ni　kwaNtu?ui　ciQce:te:saja:／ciQce:saja:.
肉きり包丁で　スイカを　（切ったのだ！）

（9）?akito:te:saja: は，＜意外な動作進行の直接確認＞を表す。?akite:saja: に言い換えることができる。

・[太郎が開けているのだろうと思って見に行ったところ，いつも雨戸を開けない次郎が開けているのを見て]

taru:gaja:Ndi　?umure:　ziru:ga　?akito:te:saja:／?akite:saja:.
太郎かと　思ったら　次郎が　（開けている！）

次のように＜客体結果や形跡に基づく過去の動作の推定＞も表すが，この場合でも意外性を伴うことが多い。

・[太郎はさっき何を一生懸命やっていたのだろうと思っていたところ，開きにくい箱が開いているのを見て] taru:ja　kunu　haku　?akito:te:saja:／?akite:saja:.
太郎は　この　箱を　（開けていたのだ！）

（10）?aki:te:saja: は，＜意外な能力・性質の発見＞を表す。能力・性質に比重をおく場合には，?akite:saja: より?aki:te:saja: の方が自然なようである。

・[家事をしない人が雨戸を開けるのを見て意外な一面に気づき]

?ja:gaN　?aki:te:saja／?akite:saja:.
おまえでも（開けるのだ！）

以上をまとめると次のようになる。下線を引いた?akite:N 形式には，アスペクト・テンス的意味からムード的意味への文法化の進展があると思われる。(?aki:N が＜進行＞を表す場合は略)

アスペクト・テンス体系

テンス＼アスペクト	完　成	進　行	客体結果（推定）
非過去	?aki:N	?akito:N	?akite:N
過　去	?akitaN	?akito:taN	?akite:taN

↓

エヴィデンシャリティー（過去の動作）

直接確認　?aki:taN	⟷	間接確認　?akite:N

↓

意外性（アスペクト・テンスからの解放）

?akite:saja:	?akite:te:saja:
?aki:te:saja:	?akito:te:saja:

5.3　主体変化動詞

主体変化動詞にも次の10の形式がある。動詞「開く」を例にして示す。主体動作動詞，主体動作客体変化動詞との違いは，（1）ʔacuN（シオル相当）が，＜（変化）進行＞の意味を保持していることである。これは，（3）ʔacoːN が＜主体結果＞を表すことと関係する。

方言形式	相当形式	主要な意味
（1）　ʔacuN	シオル	＜完成・未来＞＜進行・現在＞
（2）　ʔacaN	シタ	＜完成・過去＞
（3）　ʔacoːN	シテオル	＜主体結果・現在（未来）＞
（4）　ʔacoːtaN	シテオッタ	＜主体結果・過去＞
（5）　ʔacutaN	シオッタ	＜直接確認・過去＞
（6）　ʔaceːN	シテアル	＜間接確認＞＜意外性＞
（7）　ʔaceːteːN	シテアッテアル	＜意外性＞
（8）　ʔacoːteːN	シテオッテアル	＜意外性＞
（9）　ʔacuteːN	シオッテアル	＜意外性＞
（10）　ʔaceːtaN	シテアッタ	＜意外性＞

（1）ʔacuN は，＜完成・未来＞＜直前・近未来＞＜変化進行・現在＞を表す。人称制限はない。主体動作動詞，主体動作客体変化動詞と同様に＜反復習慣・現在＞＜恒常性＞も表す。

①＜完成・未来＞＜直前・近未来＞

・ʔacaja　zuːzini　ʔacuN.
　明日は　十時に　（開く）

③＜変化進行・現在＞

・［幕がするすると開きつつあるのを見て］maːkunu　ʔacuN.
　幕が　（開きつつある）

・ʼwaNneː　nama　ʼjuːzu　siːga　ʔicuN.
　私は　今　用事を　しに　（行く途中だ）

（2）ʔacaN は，主体動作動詞，主体動作客体変化動詞と同様に＜完成・過去＞＜パーフェクト・現在＞＜反復習慣・過去＞を表す。

・cinuː　ʼwaQtaː　majaːgwaːja　sizaN.
　昨日　うちの　猫は　（死んだ）

・kunu　macijaː　cinuː　kuzini　ʔacaN.
　この　店は　昨日　9時に　（開いた）

（3）シテオル相当形式であるʔacoːN は，標準語と同様に＜主体結果・現在（未来）＞

を表す。<反復習慣・現在（未来）>も表す。

・takabasirunu　ʔacoːN.

高窓が　（開いている）

（4）ʔacoːtaN は，<主体結果・過去>を表す。<反復習慣・過去>も表す。

・cinuːja　kunu　hasiroː　ʔacoːtaN.

昨日は　この　雨戸は（開いていた）

・ʼwaQtaː　majaːgwaːja　ʔamaNzi　sizoːtaN.

うちの　猫は　あそこに（死んでいた）

以上から，主体変化動詞では，次のような過渡的なアスペクト・テンス体系を形成していることが分かる。ʔacuN が<進行・現在>を表すことが無くなれば，標準語のアスペクト・テンス体系と同じになる。

テンス＼アスペクト	完　成	変化進行	主体結果
非過去	ʔacuN	ʔacuN	ʔacoːN
過　去	ʔacaN	△	ʔacoːtaN

主体動作動詞，主体動作客体変化動詞と異なり，シテオル相当のʔacoːN が<主体結果>を表すので，シオル相当のʔacuN が<変化進行>というアスペクト的意味を保持している。しかし，過去形のʔacutaN は，主体動作動詞，主体動作客体変化動詞と同じく<直接確認>というエヴィデンシャルな意味を表すようになっている（そのため表の<変化進行・過去>は△）。エヴィデンシャルな意味を表す場合，変化進行だけでなく，変化の完成を知覚したのでもよくなる。そして，このʔacutaN とエヴィデンシャルに対立するのがʔaceːN である。人称制限がある。

ʔacutaN　<（過去の変化の）直接確認>

ʔaceːN　<（過去の変化の）間接確認>

ここで，もう一つ留意しておきたいのは，シテオル／シテオッタ相当形式は，動詞のタイプとの対応関係において，標準語のシテイル形式とアスペクト的意味がまったく同じ，という点である。

主体動作動詞 主体動作客体変化動詞	→	<進行（動作継続）>
主体変化動詞	→	<主体結果（結果継続）>

そして，この形式とのはりあい関係のなかで，動詞のタイプに応じて法則的に，シオル相当形式，シテアル相当形式のアスペクト的意味の保持のされ方が異なる。<変化進行><客体結果>の意味は，シテオル相当形式では表せないからである。

主体変化動詞　→　シオル相当形式が＜変化進行＞を表す。

主体動作客体変化動詞　→　シテアル相当形式が＜客体結果＞を表す。

このことから，次のようなことが考えられる。

第1に，首里方言は，本来は，西日本方言と同様の＜3項対立型アスペクト＞だったのではないか，ということである。

第2に，そこに標準語型のシテオル相当形式が使用されるようになって，シオル，シオッタ相当形式やシテアル相当形式が本来的アスペクト的意味を失っていったのではないか，ということである。

第3に，首里方言のエヴィデンシャリティー形式は，次のように，＜進行＞＜結果＞というアスペクトから（部分的に本来のアスペクト的意味を残しつつ）発展してきたのではないか，ということである。なお，エヴィデンシャリティー形式が最も発達するのは，言語類型論的研究において＜過去テンス＞であることが分かってきており，諸言語と共通している。

シオル相当形式：未来テンスへ移行

シオッタ相当形式：直接確認のエヴィデンシャリティーへ移行

シテアル相当形式：間接確認のエヴィデンシャリティーへ移行

以上の点を念頭に置きつつ，主体変化動詞の他の形式を見ていくことにしよう。

（5）ʔacutaN は，形式上はʔacuN の過去形であるが，1人称主語は不可能になっており，主体動作動詞，主体動作客体変化動詞と同様に＜直接確認＞というエヴィデンシャルな意味を表す。

・[幕がするすると開きつつあるのを見たのを思い出して] ma:kunu　ʔacutaN.

幕が　（開きつつあった）

・[用事をしに行く途中の太郎に出会ったことを思い出して]

taru:ja　'ju:zu　si:ga　ʔicutaN.

太郎は　用事を　しに　（行きつつあった）

＜進行＞というアスペクトから解放されて，次のように変化の＜完成＞を知覚（直接確認）した場合にも用いられる。アスペクトからは解放されるが，人称制限はでてくる。

・[死ぬ現場を見たのを思い出して]

maja:gwa:ja　kumaNzi　kurumaNkai　haniraQti　sinutaN.

猫は　ここで　車に　はねられて（死んだ）

なお，他のタイプの動詞と同様に＜反復習慣・過去＞＜未遂＞の意味用法もある。

（6）シテアル相当のʔace:N の用法は，主体動作動詞と同じである。＜形跡・伝聞に基づく過去の変化の間接確認＞を表す。3番目の例のように＜触覚による確認＞であって

もよい。

・[水槽に金魚がいないのを見て] saNme: size:N.

金魚は（死んだのだ）<目撃＝視覚>

・[現在高窓は閉まっているが，その下が濡れているのを見て]

takabasirunu ?ace:N.

高窓が （開いたのだ）<目撃＝視覚>

・[坐ってみたところ，座布団が暖かいのを感じて]

?ai, ta:ganaga kumaNkai 'ice:N.

あれ， 誰かが ここに （座ったのだ）<触覚>

次の例では<形跡や伝聞による過去の変化の間接確認>というエヴィデンシャルな意味と<意外性>というムード的意味が複合されている。

・[太郎は一人ではおじさんの家に行けないと思っていたが，おじさんの家から貰ってきた野菜があるのを見て] ?ai, mizirasi: kutu,

あれ，めずらしい こと

taru:ja du:cuisa:ni 'uNcu:ta:kai ?Nze:saja:.

太郎は 一人で おじさんの家に（行ったのだ！）

・[隣の子猫はよそにもらわれていったと思っていたところ，死んだということを隣の人から聞いて] ?anu maja:gwa:ja size:N／size:saja:.

あの 猫は （死んだのだ！）

この<意外性>の意味が前面化すると<現在の直接確認>でもよくなる。確認のし方やテンスに関係なく<意外な新情報の発見>であることを表す。客観的に述べるのであれば，?aco:N 形式を使用する。

・[開かないと思っていた箱がぱっくりと開いているのを見て]

?ai, kunu hako: ?ace:saja:.

あれ，この 箱は （開いている！）

・[来ないと思っていた孫が玄関にいるのを見て] ?ai, ce:saja:.

あれ，（来ている！）

<意外な結果>のみならず<意外な変化進行>を見た場合もよい。

・[幕はだめになったと聞いていたのに，目の前で幕がするすると開きつつあるのを見て] 'jaNdija:ni ?akaNdi ?i:tarumuN, kunu ma:ko: ?ace:saja:.

壊れて 開かないと 言っていたのに，この 幕は （開く！）

（7）?ace:te:N は，終助詞「saja:」を伴って，<形跡や伝聞に基づく意外な過去の変化の間接確認>を表す。?ace:saja: に言い換えることができる。

・[席が決まっているはずなのに，座布団が暖かいのを感じて]

ʔai, taːganaga kumaNkai ʼiceːteːsajaː／ʼiceːsajaː.

あれ， 誰かが ここに （座ったのだ！）

（8）ʔacoːteːN は＜意外な主体結果＞や＜意外な形跡＞を表す。ʔaceːN に基本的に言い換えられる。ニュアンスの違いはあるようだが今後の課題である。

・[開かないと思っていた箱がぱっくりと開いているのを見て]

ʔai, kunu hakoː ʔacoːteːsajaː／ʔaceːsajaː.

あれ， この 箱は （開いている！）

（9）ʔacuteːN は，＜意外な変化進行＞＜意外な能力・性質の発見＞を前面化させる場合に使用されやすい。

・[幕はだめになったと聞いていたのに，目の前で幕がするすると開きつつあるのを見て] ʼjaNdijaːni ʔakaNdi ʔiːtarumuN, kunu maːkoː ʔacuteːsajaː／ʔaceːsajaː.

壊れて 開かないと 言っていたのに，この 幕は （開く！）

（10）シテアッタ相当のʔaceːtaN は，主体動作動詞と同じく出てきにくい形式であった。常識的には考えられないような変化への驚きを表す場合に使用されやすい。話し手にとって「信じられない」という気持ちが強く出るようである。

・[おじいさんの席に座るなんてことは考えられないのに]

kunuhjaːja taNmeːga ʼimiseːru tukumaNkai ʼiceːtaN.

こいつは おじいさんが お座りになる 所に （座った！）

以上をまとめると，次のようになる。ʔacutaN は，＜進行・過去＞から＜直接確認＞へと文法化が進展し，ʔaceːN では＜間接確認＞から＜意外性＞へと文法化が進展していったと思われる。また，ʔacuN は，ʔacoːN が＜進行＞の意味を表せないため，＜進行＞の意味をなおしっかりと保持していると考えられる。これは他のタイプの動詞とは異なる。

アスペクト・テンス体系（人称制限なし）

↓

テンス＼アスペクト	完 成	進 行	主体結果
非過去	ʔacuN	ʔacuN	ʔacoːN
過 去	ʔacaN	△	ʔacoːtaN

エヴィデンシャリティー

↓

直接確認 ʔacutaN	⟷	間接確認 ʔaceːN	

意外性（アスペクト・テンスからの開放）

ʔaceːsajaː	ʔaceːteːsajaː
ʔacuteːsajaː	ʔacoːteːsajaː（ʔaceːtaN）

5.4　運動動詞のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー・ミラティヴィティー

以上をまとめると次のようになる。

1）アスペクト・テンス対立，エヴィデンシャルな対立，意外性というムード用法の3つの層がある。

アスペクト・テンス対立（事象の時間の違い）	人称制限なし 動詞のタイプと相関
エヴィデンシャルな対立（話し手の確認のし方の違い）	人称制限あり すべての運動動詞 過去テンスに限定 アスペクトからの解放が進む
ミラティヴィティー（話し手の評価的感情）	人称制限あり すべての運動動詞 テンス・アスペクトからの解放

2）形式面から考えても，人称制限がないことを考えても，アスペクト・テンス対立が出発点であったと思われる。まず重要なのは，シテオル相当形式のアスペクト的意味が標準語と同じであることである。

主体動作動詞（客体変化の有無に関係なし）→動作進行

主体変化動詞　→主体結果

3）他のアスペクト・テンス形式はこれに連動している。シオル相当形式は，＜完成・未来＞に移行しているが，主体変化動詞では＜進行・現在＞の意味を保持している。シテアル相当形式は，＜間接確認＞＜意外性＞に移行しているが，主体動作客体変化動詞では＜客体結果＞の意味を保持している。

4）以上のことから，首里方言のアスペクト・テンス体系は，標準語と西日本方言との複合的様相を呈している。考えられるのは，西日本のような3項対立型から標準語のような2項対立型へと移行しつつも，エヴィデンシャルな対立という独自な側面があるのではないかということである。

5）シタ相当形式が保持されていることから，すべてのタイプの運動動詞において，シオッタ相当形式は＜直接確認・過去＞の意味に移行している。シオルとシオッタは次のような文法化を進めたのではないかと思われる。

シオル形式：＜進行・現在＞→＜直前・近未来＞→＜完成・未来＞

シオッタ形式：＜進行・過去＞→＜直接確認・過去＞

6）シテアル相当形式は，次のような文法化を進めたのではないかと思われる。①は，主体動作客体変化動詞に限定されているが，②③では動詞のタイプの制限はなくなる。そのかわりに，人称制限はでてくる。

①＜現在の客体結果＝過去の動作主体推定＞

→②＜現在の形跡＝過去の動作・変化推定（間接確認）＞

→③＜伝聞＝過去の動作・変化（間接確認）＞

7）以上のことから，すべての運動動詞において，シオッタ，シテアル相当形式は，＜過去テンス＞において次のエヴィデンシャルな対立を形成してきている。この2つの証拠性の対立がある方言は，本土では確認できていない。

シオッタ相当形式：＜直接確認＞

シテアル相当形式：＜間接確認＞

この対立では，シオッタもシテアル相当形式も，過去テンスには限定されるが，アスペクト的意味からは解放され，完成的な動作・変化であっても，シオッタ，シテアル相当形式は使用される。

8）さらに，シテアル相当形式では，次の文法化が進んだと思われる。間接確認の場合は，過去テンスに限定されていたが，意外性の場合には，発話現場（現在テンス）のことでもよい。従って，この場合のシテアル形式は，アスペクト・テンス的意味からは完全に解放され，＜発話時における話し手の感情・評価＝意外な新情報の確認＞というムード的意味に移行してしまっている。

＜間接確認（過去の運動）＞→＜意外性（新情報の確認）＞

9）この結果，次のような「重複合形式」が形成されたと思われる。重複合形式では，すべて，話し手がそれまで知識（旧情報）として有していなかった＜意外な新情報の発見＞という場面で使用される傾向があり，終助詞「saja:」を伴うのが普通である。

シテアル相当形式　→　シテアッテアル相当形式

シテオル相当形式　→　シテオッテアル相当形式

シオル相当形式　→　シオッテアル相当形式

10）＜意外性（新情報の発見）＞は，常識や話し手の予想に反する出来事の確認であり，「信じられない」といった感情・評価を伴う。このため，他の諸言語と同様に，間接確認というエヴィデンシャルな意味から発展しても不思議ではない。こうして，首里方言のシテアル相当形式は，次のような発展経路を示している。これは，世界の諸言語にも見られる＜主体化＞という文法化の経路であると思われる。

アスペクト		客体的ムード		主体的ムード
結果（パーフェクト）	→	間接的証拠性	→	意外性

6．おわりに — 時間・認識・評価的感情 —

人間は言語によって現実世界の様々な事象を認識し，相手との情報のやりとりを行う。事

象が時間のなかに成立するとすれば，話し手の事象の認識のし方と事象の時間的側面が相関するのも必然的であろう。また認識した事象に対する話し手の感情・評価や情報の性質（新情報か既有知識か）が複合されるのも当然であろう。従って，述語においては，アスペクト・テンス・ムード的側面は三位一体であって，ばらばらに切り離したのでは，首里方言の独自性と他との共通性を，共時的・歴史的観点から，複眼的に取り出していくことはできない。

以下，今まで述べてきたことをまとめると次のようになる。

1）述語という構文的機能を一次的に担うのは動詞である。動詞は＜動的事象＞を表しアスペクトの分化がある。そして，過去，非過去のテンス対立はすべての述語のタイプにある。

主体動作動詞		
テンス＼アスペクト	完　成	進　行
非過去	kanuN	kado:N（kanuN）
過　去	kadaN	kado:taN

主体動作客体変化動詞			
テンス＼アスペクト	完　成	進　行	客体結果
非過去	ʔaki:N	ʔakito:N（ʔaki:N）	ʔakite:N
過　去	ʔakitaN	ʔakito:taN	ʔakite:taN

主体変化動詞			
テンス＼アスペクト	完　成	進　行	主体結果
非過去	ʔacuN	ʔacuN	ʔaco:N
過　去	ʔacaN	△	ʔaco:taN

	存在動詞	形容詞述語・名詞述語
非過去	ʼuN／ʔaN	ʔakasaN／~ʼjaN
過　去	ʼutaN／ʔataN	ʔakasataN／~ʼjataN

2）アスペクトは，上記のように動詞のタイプに応じて異なる。標準語的側面と西日本方言的側面と独自の側面をあわせもった体系をなしている。シテオル相当形式は標準語と同じ意味を表すが，他のシオル／シテアル相当形式は，意味用法が西日本方言的であると共に，＜完成・未来＞を表すという独自の面もある。

3）シオッタ相当形式とシテアル相当形式は，運動動詞述語では，アスペクトから解放されて，次のようなエヴィデンシャルな対立を形成している。

シオッタ相当形式：＜過去の動作・変化の直接確認＞

シテアル相当形式：＜過去の動作・変化の間接確認＞

＜間接確認＞というエヴィデンシャル形式は，存在動詞，形容詞，名詞述語にもある。

4）この間接確認を表すエヴィデンシャル形式は，さらに＜意外性＞という主体的ムードを表すようになっている。すべての述語にあり，テンスからも解放されている。運動動詞述語では重複形式も生成されている。

5）上記は，事象の時間的側面から話し手の感情・評価への＜主体化（subjectivisation）＞という文法化である。

アスペクト：出来事の時間的進展のとらえ方の違い
テンス　　：発話時を基準とする出来事の時間的位置
↓
客体的ムード（情報のソース）：事象確認の証拠
↓
主体的ムード（意外性）：確認した情報に対する評価・感情

今後は，海外における言語類型論的研究の諸成果や，近隣の諸方言との関係を視野にいれた歴史的考察が重要になってくる。

追記：共同執筆者の所属は以下のとおりである。

工藤真由美　大阪大学大学院／高江洲頼子　沖縄大学／八亀裕美　京都光華女子大学

方言用例については，例文の内容・表記法も含めて高江洲が担当した。

なお，本論文は，科学研究費『方言における述語構造の類型論的研究』（研究代表者工藤真由美）の研究成果の一部である。

註

（1）世界の諸言語におけるエヴィデンシャリティー研究史については，Aikhenvald, A. Y.（2004）等を参照。

（2）次のように，-miş が複合化することも指摘されている。

Kemal gel-miş-miş. (It is said that) Kemal had come.

（3）言語類型論的研究では，エヴィデンシャリティーを，認識的ムード（あるいは認識的モダリティー）の一部として扱う論文が多いが，そうではないとする論考もある。本稿では，首里方言のエヴィデンシャリティーを＜証拠に基づく話し手の事象の確認のし方＞であると規定し，形態論的形式化がなされていることから，ムードの一部であると考えておく。

（4）首里方言の音声・音韻的特徴については，『沖縄語辞典』を参照されたい。本稿でとりあげる方言形式は，『沖縄語辞典』と異なる場合がある。①kanuN（食べる）は，kamuN の形でも発音されるが，ここでは『沖縄語辞典』と同様に，前者の形で代表させる。②『沖縄語辞典』の nunuN（飲む）は，久手堅氏はもっぱら numuN の形を使用するため，ここでは後者を採用した。③ʔakiːN は，ʔakijuN とも発音される。『沖縄語辞典』では ʔakijuN を代表形としているが，久手堅氏は ʔakiːN を使用する。現在では ʔakiːN が広く使用されているようであるため，ʔakiːN とした。④その他，'ikiganuʔuja（父），'inagunuʔuja（母）の古い発音は 'wikiganuʔuja，'winagunuʔuja であるが，久手堅氏がよく使用する方を採用した。首里方言は，かつては，貴族・士族男子だけが使う子音 sj，ş，ç，z を有していたが，現在では，s，c，z

に統一されている。

（5）正確には，上村（1963）において指摘されているように，例えば，kadoːNは「kadeː＜kadi＋-ja」（食べては）と「'uN」（オル相当形式）とが複合したものであると思われるが，この点を略して示す。他の動詞も同様である。また，シテアル相当形式としてあるkadeːNも同様に，「kadeː＜kadi＋-ja」（食べては）と「ʔaN」（アル相当形式）が複合したものであると思われる。

（6）鈴木（1960），上村（1963）では，'judeːN（読んである）を「結果態」としている。「食べる」と同様に「読む」という動作には＜必然的結果＞はない。今回の調査では，後述するように「開ける」「切る」のような客体に変化をもたらす動詞の場合には，過去形の「シテアッタ」相当形式を使うとの回答があったが，「食べる，読む，歩く」のような客体に変化をもたらさない動詞や，「開く」のような主体に変化が生じる動詞について尋ねると，インフォーマントの方が困ってしまうのが常であった。なんとか言えるかもしれないという回答が出てきたのは，「kadeːtakutu, 'jubaNtaN.（食べてあったので，呼ばなかった）」のような非終止用法であった。

（7）上村（1963）でも，この形式があることが指摘されている。

（8）鈴木（1960），上村（1963）では「持続態」とされているが，今回調査した限りでは，すべての動詞のタイプにおいて，動作・変化の＜完成＞を目撃したのでもよいということであった。この意味で，アスペクトから解放され，エヴィデンシャルな意味が前面化してきていると思われる。

（9）標準語の「～ソウダ」が表す＜伝聞＞とは違って，伝聞による＜話し手の新事実の間接確認＞である。「彼女，留学するらしい（そうだ）よ」といった場合には，話し手が既に知っている伝聞情報であり，このような場合にはシテアル相当形式は使用されない。伝聞という間接的証拠に基づく＜新情報の確認＞という点が前面化される。

（10）＜間接的証拠に基づく新情報の確認＞から，確認した新情報が話し手の予想や知識（旧情報）に反しているという＜意外性＞の意味に発展しても不思議ではない。両方に共通するのは＜話し手にとっての新たな事実＞である点だろう。

（11）誘導尋問にならないように注意して何度か確認調査を行ったが，kadeːteːNを使用しなければならない場面を取り出すことはできなかった。シテオッテアル相当のkadoːteːNも同様であった。

参 考 文 献

上村幸雄（1963）「首里方言の文法」『沖縄語辞典』大蔵省印刷局

上村幸雄（1992）「琉球列島の言語（総説）」『言語学大辞典』第4巻　三省堂

狩俣繁久・島袋幸子（1989）「今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリー ― アスペクトとヴォイス ―」『ことばの科学２』むぎ書房

狩俣繁久・島袋幸子（2006）「琉球語の終止形 ― 沖縄謝名方言と沖縄安慶名方言」『日本東洋文化論集』12号　琉球大学法文学部

金城朝永（1944）『那覇方言概説』（『金城朝永全集』1974，沖縄タイムス所収）

工藤真由美編（2004）『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系 ― 標準語研究を超えて ―』ひつじ書房

工藤真由美編（2005）『方言における述語構造の類型論的研究』科学研究費成果報告書（CD-R 付）大阪大学大学院文学研究科

工藤真由美・仲間恵子・八亀裕美（2007）「与論方言のアスペクト・テンス・エヴィデンシャリティー」『国語と国文学』84－３　東京大学国語国文学会

鈴木重幸（1960）「首里方言動詞のいいきりの形」『国語学』41

高江洲頼子（1994）「ウチナーヤマトゥグチ ― その音声，文法，語彙について ―」『沖縄言語研究センター報告』３　沖縄言語研究センター

津波古敏子（1989）「不完成相につきまとう臨場性 ― 首里方言のばあい ―」『ことばの科学２』むぎ書房

津波古敏子（1992）「琉球列島の言語（沖縄中南部方言）」『言語学大辞典』第４巻　三省堂

津波古敏子（1994）「琉球方言における動詞のテンス・アスペクトはどのように記述されたか」『沖縄大学紀要』第11号　沖縄大学教養部

服部四郎・金城朝永（1955）「琉球語」『世界言語概説　下巻』三省堂

服部四郎（1959）『日本語の系統』岩波書店

平山輝夫・大島一郎・中本正智（1966）『琉球方言の総合的研究』明治書院

宮良信詳（2002）「沖縄中南部方言動詞のモダリティ」『言語研究』122

Aikhenvald, A. Y. (2004) *Evidentiality*. Oxford UP.

Chamberlain, B. H. (1895) *Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language*（『琉球語の文法と辞典　日琉語比較の試み』山口栄鉄編訳・解説，2005，琉球新報社）

DeLancy, S. (2001) The Mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 3

Slobin, D. and A. Aksu (1982) Tense, Aspect and Modality in the Use of the Turkish Evidential. Hopper, P. (ed.) *Tense-Aspect*. John Benjamins.

Aspect, Tense and Evidentiality of *Shuri* Dialect in Okinawa Prefecture

Mayumi KUDO
Yoriko TAKAESU
Hiromi YAKAME

As a case study, we present aspect-tense-evidential systems of *Shuri* dialect in Okinawa prefecture.

Verbal expressions have traditionally been discussed in terms of tense, aspect and mood. Tense locates the event in time. Aspect characterizes the internal temporal structure of the event. Mood is concerned with the reality of the event. Especially, evidentiality represents the various bases that a speaker can use for specifying the reality of the event. We wish to argue here that these morphological categories cannot be studied in isolating from one another.

Shuri dialect has verbal morphology that encodes two types of evidentiality. Direct evidentiality expesses the speaker's direct sensory confirmation. Indirect evidentiality is used to imply the speaker's inference from indirect evidence that the event really took place.

1) **maja:ja** **sinutaN**. 'The cat died.'
cat die<direct evidence>

2) **maja:ja** **size:N**. 'The cat died(apparently or reportedly).'
cat die<indirect evidence>

Historically, direct evidential forms seem to be developed from forms expressing past-progressive. Indirect evidential forms seem to be developed from forms expressing present-resultative. Furthermore, there are cases where the speaker may know that the statement he is making is true but uses indirect evidential forms to show that the information comes as a surprise or was not part of his knowledge previously.